

吃音や自分と向き合う子どもの育成

千葉市立あやめ台小学校 渡邊 美穂

はじめに

吃音は、吃音症状だけの問題ではない。私は子どもたちが、どもることを認め、吃音と自分と向き合いながら、生きぬく力を育てることが大事であると考えた。教材として扱った「どもりカルタ」の学習などを通して自分と向き合えるようになった子どもたちの様子を紹介したい。

1 表現する・・・「どもりカルタ」作り

「どもりカルタ」の学習での子どもたちのつぶやき

聞こえたよ。友だちが言ってくれたトイレの「ト」

Aさん：授業中に、トイレに行きたくなかったけれど、なかなか担任の先生に話せなくて困っていた。いつもぼくをからかっていた子が「ト」と言ってくれたお陰で「トイレに行ってきたいいですか」とことばがでてきた。周囲は、自分のことを理解してくれているのかとうれしかった。



【資料1】Aさんの「どもりカルタ」

まねされて、嫌な気持ちを言い返す

Bさん：友だちにまねされたことがあり、悔しかった。はじめは、ぐっと我慢していたけれど、ずっとまねしてきたので「やめろー！」と言って怒った。そしたら、相手がびっくりして、もう言わなくなった。言い返してよかった。

「お」と「ち」と「つ」と「と」は、言いにくい

Cさん：みんなは、母音が苦手だと言ってたけれど私は、特にこの4つが苦手。特に文の始めにでてくると音読しにくいので、前の文の終わりの部分と一緒に一気に読むとうまく読めた。音読は、もうこわくない。

平気だよ。どもっていても気にしない

Dさん：どもることを治したいと思っていたけれど、今は「まあいっか」と思えるようになった。嫌じゃないけど、時々不便だなと思うことがある。だけど、仲間がいるから大丈夫だと思えるようになった。

ロボットみたいな話し方、ぼくは絶対つかわない

Eさん：どうしてもどもりたくないと言ったら、お母さんに「ゆっくり、そっと」言う方法を教えてもらった。普通に読んだ音読と「ゆっくり、そっと」読んだ音読を録音して聞き比べた。「ゆっくり、そっと」では、ほとんどどもらなかつた。でも、感情がなく、ゆっくり話すじれったさが、とても嫌だった。こんなロボットみたいな話し方より、たくさんどもっても言いたいことは気持ちを込めて話す方がいいと思った。どもる方がいいなんて、自分でも驚いた。

2 話し合う・・・吃音のある子たちの話し合い（お互いのカルタを見せ合った）

Bさん：ぬかさないで、まっててね

Cさん：ぬかしてくれて、ほっとした

これは、在籍学級での音読の状況である。みんなと同じように、どんなにどもっても読むBさんとその日は、ちょっと調子が悪かったからぬかしてもらったCさんとの会話。

Bさん：音読は嫌いだけど、どもるからってやらないわけには、いかないよ。

それに最後まで読めないのは悔しいから、どんなにどもっても、がんばるよ。

Cさん：でもさ。難発になってさ。読もうと思ってもどうしようもないこともあるんだよ。

そういう時は、ぬかしてもらったらほっとするけどな。

Bさん：みんなになんか言われたい？

Cさん：言われたいよ。だって、ぼくがどもることみんな知ってるもん。前に、どもることや、言いにくいことばがあつてことばがでてこないことがあるって説明したから、大丈夫なんだ。

Bさん：そうか。みんなに言っておけばいいのか。でも、勇気あるね～。

3 遊ぶ・・・カルタ大会

在籍学級で「どもりカルタ」を使って遊んだ。どもることや、カルタ込めた思いを説明した。「もっと、クラスで、どもりカルタをしたい」とクラスの友だちに言われてうれしそうだった。このクラスだったら、どもってもいいかと、思えたようである。

4 周囲に働きかける・・・自分や吃音のことを身近な人に話す

<在籍学級で自分ことを手紙に書いて読んだ。（2年生）>

ぼくは、みんなに知ってほしいことがあります。それは、ぼくのことばのことです。1年生の時からことばの教室通っています。ぼくは、ことばがどもります。「どもる」というのは、ことばをくり返して話すことです。みんなは、ぼくがどもると「変だな」とか「どうしてそんなしゃべり方をするの?」と不思議に思うと思います。ぼくも、どうしてかわかりません。

だから、どもるマネをされたり、からかわれたりすると悲しい気持ちになります。それに、話している時に笑われたりするのも嫌です。ぼくが、どもっていても気にしないでほしいです。心の中で「がんばれ」と思ってくれたらもっとうれしいです。でも、なかなかことばがでてこない時は、深呼吸をしてから話すようにするので、慣れてほしいです。

ぼくはこれからも、ことばの教室で言いたいことがうまく伝えられるようにがんばります。

<在籍学級で自分の作った「どもりカルタ」を紹介した。（3年生）>

在籍学級の友だちからの手紙

○自分のことを一生懸命に話していて、すごいと思った。

○「どもる」ってことや、いつもこんなことを考えていたんだということがわかった。

○「どもりカルタ」でもっと遊びたいな。

お母さんからの感想

○堂々と発表していた姿を見て、うれしくなりました。これからも、みんなに感謝しながら息子らしく生きていってほしいと思っています。

5 自分と向き合う・・・将来を考える

(1) 吃音を受け入れたカルタ

世界の吃音のある人と会ってみたいな (1年生)

Dさん：吃音のある人が世界中に、100に1人の割合でいるということを知り、自分だけじゃないんだと思ったら、楽になった。

目と目を合わせて伝えたい

Aさん：話したいことは、いっぱいある。だから、相手の目を見て伝えたい。どもっていても、目を合わせて伝えたいと思う。



【資料2】Aさんの「どもりカルタ」

(2) 職業について考えるワーク

どもる人が、いろいろな職業に就いていることを「吃音ワークブック」のワークを学習して子どもたちは知った。特に、先生やアナウンサー、落語家など話すことが多い職業に就いていることがわかって驚いていた。自分がやりたい仕事だからこそ、どんなに辛くてもがんばっていけると聞き、子どもたちは真剣に将来について考えていた。子どもたちが今後の社会生活を想像することは、難しいと思われたが、どもる人の情報を知らせることで、将来を考えるきっかけになった。

市役所(公務員)	社長さん	大工さん
パソコンプログラマー	テレビ局のカメラマン	コック・ウェイトレス
先生	バスガイド	お店屋さん
セールスマン	印刷屋さん	農家
工場働く人	スピーチセラピスト	自動車の修理
ピアニスト	結婚式の司会	政治家
消防士	水道屋さん	新聞記者
お坊さん	看護師	作家
お医者さん	選手	レントゲン技師
ガードマン	落語家	弁護士
会社の事務	アナウンサー	俳優

【資料3】吃音のある人の職業

(3) 言語関係図作りのワーク

「どもりカルタ」を通して自分や吃音を知り、前向きに生きていこうとする姿がみられた。個々に積み木を使って言語関係図を作って現在の状況を話し合った。

<それぞれの言語関係図が減ってきたことについて>

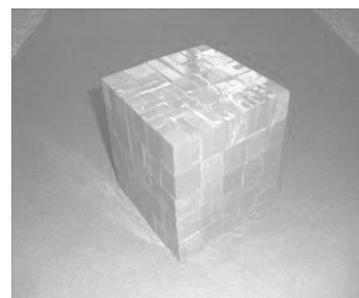
X軸が短くなってきた理由

- 吃音の話ができる人が増えた。(担当者・家族・吃音のある子)
- どもってもしょうがないと、思えるようになった。
- どもることは、不便な時もあるけど嫌じゃなくなった。

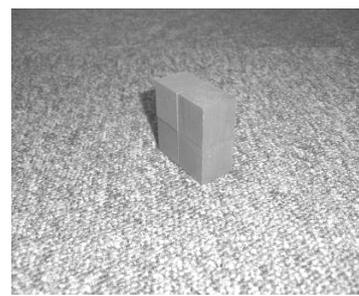
Y軸が短くなってきた理由

- 在籍学級の先生に、自分がどもるということを話した。
- 自分から在籍学級の友だちに「ぼくがどもること」について手紙を書いて、聞いてもらった。それから、気が楽になった。
- 自分で作った「どもりカルタ」を在籍学級の友だちと遊んだ。そして、「気持ちが伝わってきた」と言われてうれしくなった。
- 音読を順番にする時、声がでなくて困った。担任の先生は「いいよ。後でまた読んでね」と言ってくれた。本当は、読めなかったことがつらかった。

1年生



4年生



【資料4】Aさんの言語関係図

けれども、まわりの友だちは、そのことについて何も嫌なことを言わなかった。自分のことを先生も友だちも知ってくれているんだと思ったら、気持ちが楽になった。これは、嫌な経験ではなく、いい経験だったのかと思えるようになった。

Z軸が短くなってきた理由

- X軸やY軸が短くなってくると、Z軸も短くなってきたように思う。
- 吃音についての知識をたくさん知ったことで、安心できたと思う。
- 世の中には、どもる人はたくさんいることや、いろいろな職業に就いていることがわかって安心した。
- 吃音は、治らなくてもいいと思えるようになってきた。

<今後、言語関係図はどうなるか>

- また、長くなると思う。クラス替えや中学、高校などいろいろな人に出会うたびにドキドキしてY軸が長くなりそう。
- 全部の軸が短くなって、図がなくなるかも。
- 長くなったり、短くなったりをくり返してくんだと思う。

<全員の意見のまとめ>

- それぞれの軸を自分の力で短くできるから、また長くなったら自分で短くすればいいね。
- なんとか、これからもやっていけそうだね。

おわりに

「どもりカルタ」を通して吃音の知識を学んだり、気持ちを話したりしながら子どもたちは、自分や自分の吃音と対話していた。更に、グループ学習を行うことでつらい気持ちや吃音の情報、どもっても大丈夫という価値観を分かち合っていた。そして、子どもたちが吃音と共に生きていくために環境調整の名のもと、従来教師や親などが行っていた周囲に理解を求めることを自分の力で働きかけていた。言語関係図の学習からもわかるように、それぞれの形は違うが現在の吃音の問題が小さくなってきた。

しかし、今の思いや考えを今後も持ち続けるとは考えにくい。子どもたちは周囲の状況の変化に応じて考えや思いも変化し、吃音にまた悩むことも考えられる。その時に、自分でなんとかやっていけるようになってほしいと考え、このような取り組みをしてきた。

また、グループ学習を通して仲間がいることを知らせてきた。また、他のことばの教室に通っている子どもたちとの年三回の「交流会」や、日本吃音臨床研究会が行っている「吃音親子サマーキャンプ」に担当している子どもと一緒に参加するなどしてきた。「キャンプ」への参加や「DVD吃音を知る」を観るなどしてどもるのは自分だけではないことを知ったり、吃音の話題で語り合ったりするようになった。また、親同士も仲間ができ、安心して子育てを楽しめるようになったと言っていた。

今回「どもりカルタ」と言語関係図の取り組みを紹介した。「どもりカルタ」では、吃音について気持ち、情報、価値観について分かち合い、言語関係図では、積み木を作ることで、内面にある吃音を外に出して眺めることができた。吃音の問題が積み木という目に見える形があるものとして眺めることで自分の力で大きくも小さくもできることを感じてくれたようだ。ただ吃音について話し合うだけでは深まらないものが「どもりカルタ」や「言語関係図」という教材を通じたワークを個別やグループ学習で取り組むことにより、深まった。今後、吃音と向き合う教材と一緒に考えていきたい。

